

第10講:「元の理」の人間学／人類学

おやさと研究所長
井上 昭洋 Akihiro Inoue

神話とは

「元初まりの話」は『天理教教典』の「第三章 元の理」に収められた創世説話であり、「おふでさき」と「こふき本」に基づいて編纂された人間と世界の創造についての物語である。「元の理」は天理教の教理的原理を意味するが、創世説話である「元初まりの話」そのものを指して用いられることも多い。天理教学では一般に、これを創世神話ではなく創世説話として捉えることが強調される。しかし発表では、人間と世界の起源を語る物語という内容的特徴と、口伝の起源を持ち教祖承認の決定版が存在しないという伝承形態から、神話の性格を帯びたテキストとして扱う。

神話とは世界の起源や人間存在の根拠についての口承伝承であり、世代を超えて伝えられた集合知、共同体の記憶である。神話は現実を説明し解釈するためのフォーマットを提供し、それを真実として受け入れる人々にとって現実解釈の枠組みとなる。レヴィ＝ストロースによれば、神話的説明には二つの性質がある。一つは「時間的統合機能」であり、過去によって現在を説明し現在によって未来を説明して、ある秩序が永久に続くことを確認するものである。もう一つは「複数コードまたは多重コードの使用」であり、宇宙のさまざまな次元において事物がなぜ現在の姿であるかを一つの筋で説明すると同時に、異なる次元間の類似や照応をも説明するものである。

神話は「二項対立」「変換」「媒介」という三つの方法で物事を説明する。二項対立とは相互に規定し合う対立項目の関係のことであり、神話は「自然」と「文化」、「生」と「死」、「男性」と「女性」などの対立を並べて意味体系を構築する。変換は要素を入れ替えても構造(根本的な枠組み)が保たれるような入れ替え操作のことであり、神話には不変の構造があることを神話群(神話の集合体)の中での神話の変換を通して示す。媒介は対立する項目を近づけたり第三の項目を導入したりすることで二項対立の問題を物語の中で解決する。

テキストとしての「元初まりの話」

「元初まりの話」は、世界のあり方の根拠(元の理)を示し、人間の生きていくモデル(陽気ぐらし)を提供する口承形式の話(こふき)であり、始原の時(元初まり)が語られ、儀礼(かぐらづとめ)との間に補完関係がある。これらの点で神話の定義を満たしている。また、時間的統合機能や多重コードの使用といった神話の性質も備えている。原作者が教祖として存在する点で神話ではなく説話といえるが、この一点を除けばほぼすべての神話の定義や特徴が当てはまる。さらに、「元初まりの話」の元となった「こふき本」が教祖の承認を得られなかったことを考えると、オーソライズされたオリジナルのテキストが存在しないという意味で神話的なテキストともいえる。

「元初まりの話」は三幕からなる。第1幕は雛型と道具の確定、第2幕は三度の宿し込みと三度の出直し、第3幕はめざる一匹以降の人間の成長を描く。前半(第1幕・第2幕)は月日親神による人間創造を、後半(第3幕)は神が退いた後の人間の成長を物語る。「おふでさき」では第1幕について詳しく述べるが、

第2幕は概略のみで第3幕には全く触れておらず、かぐらづとめも主に第1幕を表象している。

「元初まりの話」を構造主義人類学で読み解く

本論では「元初まりの話」を素直に読むときに生じる二つの疑問を、構造主義的視点から読み解く。第一の疑問は、月日親神は一柱なのか月様と日様の二柱なのかという問題である。この問題は「二つ一つ」という教理によって解消されるが、『天理教教典』の「元初まりの話」においては^{ほころ}綻んだままである。教典版の創世説話の第1幕では、別席台本の説話にある「御相談の上」という文言が省かれており、月日親神は相談できる相手のいない単一の神として表記される。「こふき本」に記される月日兩人から月日親神という単数の主語への変更は、一神教としての天理教を明示するためのサニタイズ(無菌化)であったと考えることができるのではないだろうか。

しかし第2幕の人間創造の場面では、月様がいざなぎのみことの体内に、日様がいざなみのみことの体内に入り込むと述べられている。ここでは月日親神を別個に描写せざるを得ず、第1幕における一神教的表現との整合性が取れない。「こふき本」の創世説話を構造的に読めば、月様と日様という対立する二つの原理が、いざなぎのみことといざなみのみことという交わる両神を媒介項として統合され、人間が創造されるという古典的な神話的論理が認められる。一方、『天理教教典』の「元初まりの話」においては、深層における月様・日様の対立と相補の構造が、表層の一神的表記によって完全に解消されず、人間創造の場面で不可避的に露呈してしまったと解釈できる。

第二の疑問は、第2幕から第3幕への唐突な飛躍についてである。いざなみのみことが身を隠した後、人間が残らず出直し、その後、虫、鳥、畜類と八千八度の生まれ変わりを経てめざるが一匹残ったと続く物語の流れに、誰もが断絶・飛躍を感じるだろう。しかし、この説話の神話素を抽出し「生」と「死」を対立軸として分析すると、各幕の特徴が見えてくる。第1幕は「生」の条件としての「死」、および「生」の準備を語る。親神が水棲動物を引き寄せ、貰い受けて食べることは動物にとっての「死」であり、それぞれに道具としての役割と神名を与えるのは「生」の準備である。第2幕は「生」と「死」の循環を語る。そこに流れるのは、宿し込みと出直しが三度に留まらず、四寸から五尺になるまで象徴的には無限に繰り返されるような循環する時間といえる。一方、第3幕では成長が約束された「生」のみが語られ「死」は出てこない。そこでは天地が段階的に形成されるのに必要とされる直線的な歴史的時間が流れている。このように考えると、第2幕と第3幕の断絶は、始原の時に始まる神話的時間と人間の歴史的時間の間の裂け目として理解することもできる。

構造主義的分析は、物語の単なる読解や教理的解釈だけでは説明しきれない神話の綻びや亀裂、緊張を、対立項の配置という観点から照らし出すことを可能にする。このようなアプローチは、教理的・信仰的な解釈をより豊かにするものであり、「元の理」の人間学の構築に向けて必要とされる作業である。